

それでは、肉による私たちの先祖アブラハムのばあいは、どうでしょうか。4:2 もしアブラハムが行ないによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。しかし、神の御前では、そうではありません。4:3 聖書は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義とみなされた。」とあります。4:4 働く者のばあいに、その報酬は恵みでなくて、当然支払うべきものとみなされます。4:5 何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。4:13 というのは、世界の相続人となるという約束が、アブラハムに、あるいはまた、その子孫に与えられたのは、律法によってではなく、信仰の義によったからです。4:14 もし律法による者が相続人であるとするなら、信仰はむなしくなり、約束は無効になってしまいます。4:15 律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。4:16 そのようなわけで、世界の相続人となることは、信仰によるのです。それは、恵みによるためであり、こうして約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。「わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした。」と書いてあるとおりに、アブラハムは私たちすべての者の父なのです。4:17 このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るものようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。

皆さんは、選挙の立候補者が街頭演説を始める場面に出くわしたことがあるでしょうか。または、そのような場面をテレビで見たことがあるでしょうか。ほとんどの演説は、「ご通行中の皆さん」あるいは「お集まりの皆さん」などの呼びかけで始まります。呼びかけは大切です。なぜなら、「私はあなたに語りかけています」という意思を伝えて、聞き手の注目を集める効果があるからです。同じ目的で、牧師も説教を始める時に、「主にあって愛する兄弟姉妹の皆さん」や「主にあって愛する友である皆さん」と呼びかけます。決して、無意味に呼びかけているものではありません。

呼びかけ効果は手紙の場合も同じです。パウロの手紙には、読者への呼びかけが必ず入っています。この手紙では、「ローマにいるすべての、神に愛されている人々、召された聖徒たちへ」と、先ずローマ教会の全信者に呼びかけました(1:7)。11 章 13 節では、「異邦人の方々に言いますが・・・」と、ローマ教会の異邦人信者に呼びかけました。そして今日の箇所では、「それでは、肉による私たちの先祖アブラハムのばあいは、どうでしょうか」と、自分と同じくアブラハムを先祖とするイスラエル人(ユダヤ人) 信者に呼びかけました。パウロは何を語りたかったのでしょうか。私たちも聞きましょう。

I. アブラハムは信仰によって救われました。

パウロは先祖アブラハムの場合を例にして、人はどのようにして神の御前で義と認められるかを、イスラエル人信者に教えました。「義と認められる」あるいは「義とみなされる」とは、神の法廷で無罪を宣言されることです。ローマ教会は若い教会で、まだ専属の牧師がいなかったので、信者たちは聖書の教えを深く理解していませんでした。「人はどのようにして神の御前で義と認められるか」という聖書の根本的な教えに関しても、十分に理解していませんでした。実は、紀元 1 世紀のイスラエル人社会では、「行ないによる義認」が流行していました。例えば、ある金持ちの青年は、「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか」とイエスに質問しました(マタイ 19:16)。この青年は「私は良い行ないをしているので、それによって神から義と認められ、永遠のいのちを獲得できる」と自信を持っていました。また、イエスの弟子たちが手を洗わないでパンを食べているのを見たパリサイ人は、イエスを責めて言いました。「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人々の言い伝えに従って歩まないで、汚れた手でパンを食べるのですか」(マルコ 7:5)。パリサイ人は「昔の人々の言い伝えを守れば身をきよく保つことができ、神の御前で義と認められる」と考えていました。以上のような考え方を「行ないによる義認」と言います。

最初の両親アダムとエバが罪に汚れて以来、行ないによる義認の考えは人間の心に根付いてしまったので、簡単に変わりません。その考えは、ローマ教会のイスラエル人信者にも残っていました。ですからパウロは、人は行ないによって義と認められるのではないことを、先祖アブラハムを例にして教えました。アブラハムはすべてのイスラエル人から「父」と呼ばれ、尊敬されていました。もしアブラハムの思いとことばと行ないが神からご覧になって完全だったなら、神の御前での義認は、彼が行ないによって獲得したものでした。そうだとしたら、彼は人に対してだけでなく、神に対しても自分を誇ることができました。しかし、聖書には何と書かれていたのでしょうか。パウロはイスラエル人信者に創世記 15 章 6 節を思い出させ、「アブラハムも神を信じて、義とみなされました」と教えました。完全にきよい神からご覧になれば、アブラハムでさえ、何の働きもない者、不敬虔な者でした。自分の努力や行ないによっては義を獲得できない者でした。生まれながら罪に汚れていて、思いとことばと行ないによって、毎日多くの罪を犯している者でした。本当ならば、義ではなく、神の聖なる怒りと罰を受けるにふさわしい者でした(エペソ 2:1-3)。

そのような彼が義と認められたのは、天地万物の造り主である真の神とその約束を信じる信仰を通しての、神の恵みで

した。アブラハムが信じた約束とは、彼と子孫に国が与えられ、彼の子孫が大いに増え、その中から全人類の救い主が生まれることでした。もちろん、その三つの中で一番大切だったのは、救い主についての約束でした。異邦人の国で生まれ育ったアブラハムを救い主の先祖とするために、神の方からアブラハムに近づきました。アブラハムが神を捜し当てたのではありませんでした。使徒の働き 7 章 2 節と 3 節に、「私たちの父祖アブラハムが、カランに住む以前まだメソポタミヤにいたとき、栄光の神が彼に現われて、『あなたの土地とあなたの親族を離れ、わたしがあなたに示す地に行け。』と書かれました。」と書かれています。

アブラハムは神の約束を信じました。彼の信仰はむなしい夢ではありませんでした。救い主が未来に成し遂げる祝福で満たされていました。アブラハムは、彼の子孫から生まれるイエスがゴルゴタの十字架の上で成し遂げることを、“模型”を使って体験的に学びました（創世記 22:1-14）。神は彼に、「あなたの愛するひとり子イサクを、私が指定する山の上で、あなたの罪を償ういけにえとしてささげなさい。」と命じました。実際には、神はイサクを捧げさせるつもりはありませんでした。しかし、それはアブラハムに知らされていなかったもので、神の命令は彼にとって大きな試練でした。彼は神の計画を完全に理解できませんでしたが、神は死者を生き返らせることができる方であると信じて、イサクをほふろうとしました（ヘブル 11:17-19）。その時、神は彼を止めて、用意しておいた身代わりの雄の羊（世の罪を取り除く神の小羊であるイエスの模型）を捧げさせました。そこは、後にエルサレムが建設された場所でした。つまり、神はその体験学習を通して、「すべての人の罪を償うために、わたしがわたしの愛するひとり子をこの場所でいけにえにする」とアブラハムに教えました。彼はそれが分かったので、その場所を「主の山には備えがある」と名付けました。

神は救い主に関する約束をアブラハムに聞かせ、その約束を信じる信仰を彼の心に造り出し、その信仰の恵みとして彼のすべての罪を赦し、義と認めました。そして、アブラハムの信仰が弱くなる度、神は救い主に関する約束をくり返して聞かせ、彼の信仰を強めました。そのように、アブラハムが神を信じたのも、神の御前で義と認められたのも、信仰が強められたのも、すべては神の恵みでした。アブラハムは、自分の子孫から生まれる救い主が、エルサレムですべての人の罪の償いを成し遂げる日を思って、大いに喜びました（ヨハネ 8:56）。

II. 神の約束はアブラハムの信仰にならうすべての人々に保証されます

パウロはこの箇所をイスラエル人のクリスチャンに語りましたが、それは、「神がアブラハムに与えた約束は、イスラエル人だけが受け継ぐものだ」という意味ではありません。その約束は、律法を持っている人々（イスラエル人）にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々（異邦人）にも保証されています。アブラハムの信仰にならうとは、「行いによって義と認められる」と誇る信仰ではなく、「神が備えた救い主を通して、神の恵みによって義と認められる」という信仰です。「神には死んだ人をよみがえらせる力がある」と信じる信仰です。アブラハムの信仰にならう人は、信仰的に彼の子孫であり、すべてを支配するイエスとともに世界の相続人になります。

神がアブラハムに約束した通り、イエスはイスラエル人の罪だけでなく、すべての国の人々の罪を身代わりに背負い、十字架に架って死ぬために、ゴルゴタの丘を目指して歩み続けました。悪魔に誘惑されても、救い主の道からはずれませんでした。うその訴えをされても弁明しませんでした。あざけられても、つばをかけられても、むち打たれても、ひるみませんでした。そして、すべての人のために、神の御前で罪の赦しを獲得しました。そのことは聖書にはっきり書かれています。「神は、キリストにあつて [キリストの身代わりの死によって]、この世 [すべての人々] を和解させました」（2 コリント 5:19）。「この方 [イエス]こそ、私たちの罪のための、・ ・ ・私たちの罪だけでなく全世界のための、・ ・ ・なだめの [神の怒りを取り除くための] 供え物なのです」（1 ヨハネ 2:2）。「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです」（マルコ 10 : 45）。

悪魔は、私たちの罪深い性質や人間の考えた宗教によって、行ないによって天国に行けるような錯覚を私たちに起こさせます。悪魔にだまされて、そのような誤った考えに陥らないようにしましょう。アブラハムやパウロの場合と同じで、私たちの罪が赦され、永遠の命が与えられたのは、私たちの罪を負って十字架の上で尊い血を流したイエスを信じる信仰の恵みです。神はすべてのクリスチャンが善行をすることを望んでいます。しかし、クリスチャンの善行は神の御前で行ないによる義を獲得するためではありません。すべての罪を無条件で赦して下さった神への感謝の表現です。

私たちはパウロの声を直接に聞きませんが、パウロはこの手紙を通して私たちにも語りかけています。私たちはイスラエル人ではなく、異邦人ですが、神がアブラハムに与えた「救い主による恵みの義認」の約束は、私たちに与えられた約束でもあります。神の御前で罪が赦されているかどうか不安になる時、アブラハムやパウロの信仰を思い出しましょう。彼らの信仰は、彼ら自身の行ないに基づいていませんでした。神が約束した救い主に 100%基づいていました。私たちも救い主イエスに 100%信頼しましょう。イエスは罪の赦しに基づく喜びと平安と希望で、私たちの心を満たすことができます。